

第2回函館市基本構想審議会会議録

○ 開催日時： 令和8年（2026年）6月30日（火） 18：30～20：52

○ 開催場所： 函館市役所8階大会議室

○ 出席者

委 員：齋藤委員，寺井委員，秋山委員，浅井委員，小林委員，佐藤（均）委員，
佐藤（ひ）委員，四戸委員，竹内委員，津熊委員，永澤委員，田口委員
（委員名簿順〔12名〕）

市 側：〔企画部〕渡邊部長，木谷室長，井本課長，西山主査，細越主任主事

.....

1 開会

2 審議

（1）次期函館市基本構想について

（齋藤会長）

委員15名中12名の出席により，委員半数以上の出席の条件を満たしますので，本日の審議会は成立しております。

次第の「2審議」に入りたいと思います。

「（1）次期函館市基本構想について」，まずは事務局から説明をお願いいたします。

（事務局 井本課長）

－ 資料1および参考資料1～2に基づき説明 －

（齋藤会長）

ありがとうございました。大変でしたね。資料を読み取るのが大変でした。必死で食らいついてきましたが，ところどころ聞き漏らしたかもしれません。

僕の整理としては，今のご説明を受けて，こんなふうに資料を読めば良いんだなというのを理解したと。それについて，一つ一つ読み込みながら議論するのはこれからだと思っていますので，今のご説明で委員の皆さんが全部読み込んだとは僕は思っていません。今の説明で資料の読み方が分かったと，どういうふうに作ったのかも分かったと。そして，前回の意見がどのように反映されたのかということも分かったよと。その上で，反映のされ方が甘いとか，あるいは分析の仕方や視点が少し違うのではないかとか，ここの書きぶりはもうちょっと踏み込んだ方が良いのではないかとか，あるいはこれだとちょっと言い過ぎではないかとか，その辺りを皆さんと一緒に点検していくという作業が，これからの時間かなと思っています。

これだけの膨大な資料ですので，委員の皆様方が一人ひとりの目で，ここは違うとか，ここはこうだとか発言いただかないと読み漏らしが出てきます。一人が全部を理解するのは難しいので，一人ひとりがぜひ気づいたところを出していただくと大変助かると思っています。おそらく，お一人の方が気づいた点が他の人は気づいてない場合があると思いますので，ぜひ意見を出し合って良い審議

にしたいなと思っております。

これからの進め方ですが、全体としてどうですかというのは乱暴なので、1章ごとに区切っていいと思います。次回も含めて全体を議論すれば良いので、今日は半分行けばOKです。なので、この目次の作りからいくと第3章ないし第4章くらいまでを目指していきたいと思います。第5章「実現に向けて」までは、今日は難しいかなと思いながら事務局からのご説明を伺っておりました。では、限られた時間ですので、早速審議に入ってまいりたいと思います。

第1章「概要」の部分です。検討資料の改訂版を見ていただいて、策定の意義とか、期間とか対象区域ということが書いてあります。皆様から何かお気づきの点はありますか。前回の議論でも、長いスパンを見据えながらやっていかなくてはいけないものと、短いスパンで見ていくもの両方あるけれども、ひとまずこの計画についてはその両方を見据えながらも、期間は10年ということで、前回の会議でコンセンサスを得たところかと思しますので、期間もこれで良いかなと思っておりました。こちらはひとまずこれでよろしいですか。では、またお気づきの点がありましたら、その際に戻ってと伝えていただけたらと思いますので、次に進みます。

では、第2章「本市を取り巻く状況」の「1 社会情勢」です。これについて、お気づきの点がありましたらお願いしたいと思います。こちらの(1)から(5)までのところは、前回は目次案のような形でお示しいただいているので、この柱立ては今回変わっておりません。この柱立てにぶら下がる本文の部分が今回新たに加わった部分ですので、この書きぶりがちょっととどうかなというところが、議論のポイントになります。

(寺井副会長)

2点気になったことがあります。まず、グローバル化の拡大ということですが、どちらかというとも良い側面を捉えて記載されたと思いますが、現状は世界情勢の不安が広がっており、悪影響もいろいろ出ていると思います。そういった記載はなくても良いのかなというのが気になりました。

(齋藤会長)

まず、1点目。グローバル化の拡大のところが、どちらかというともポジティブな書きぶりになっているけれど、ネガティブな部分についての記述が必要なくて良いんですか、ということですね。これは答えた方が良いか、ご意見として承った方が良いかどうでしょう。

(事務局 井本課長)

ご意見として承りました。検討させていただきます。

(齋藤会長)

少しネガティブな部分も含めて入るのか入らないのか、事務局で預らせてくださいという整理ですね。では、もう1点をお願いします。

(寺井副会長)

もう1点は「(5) 大規模災害への対応」についてです。気候変動の影響による災害への影響というのはたしかにあると思いますが、函館について考えると、例えば漁業への影響とか、そういったこともすごくあるのかなと。災害とは少し言いにくいのですが、環境問題の産業への影響とかそういった

たことが少し現状は抜けてしまっているのかな、というのが気になりました。

(齋藤会長)

【2 本市を取り巻く状況】の「1 社会情勢」の(5)の中に、平たく言うと、イカが獲れないとか、魚種が変わってきたとか、災害ではないけれど本市を取り巻く状況の変化は間違いなく生じていて、それをどこかに入れなくて良いのかという話ですね。

(事務局 井本課長)

そこも合わせて、ご意見として承りました。検討させていただきます。

(齋藤会長)

ありがとうございます。これも一旦預かっていただくということですね。こんな調子で、皆様方もお気づきの点がありましたら。僕も今の指摘は気づきませんでしたので、皆様方それぞれに気づいた点がありましたら、ぜひ出していただければと思います。

(浅井委員)

第1回に参加できなかったので確認も含めてになりますが、「1 社会情勢」に関してお聞きしたいです。

「(5) 大規模災害への対応」は、防災・減災というところまでのお話がされていて、実際に例えば大津波が起きて避難所に避難した際、避難所における健康で文化的な管理体制や、トイレや食事がどうか、プライバシーが保たれていないとか、実際に災害が起きた後に、市はどのような体制で取り組んでいくのか、どういうふうここに触れられているのか、分からないので教えていただきたいです。

(齋藤会長)

今のご指摘の点は、前回の会議でも多少議論になりました。指摘された内容ではなく、枠組みといえますか、つまり、この基本構想の中にどれくらい具体的に盛り込むべきなのかという議論になってくると思います。今の浅井委員のご指摘はその通りですが、これをこの基本構想の中に具体的に書き込んでいくのか、それとも、これは上位の構想なので、それを包含するような書きぶりにどこかがなっていれば良しとするのか。それを含んだ書きぶりになっていないとすれば、それを含んだ項目が必要なのではないかとか。どこら辺に該当する、あるいは該当しないので付け足そうとか。事務局どうですか。

(事務局 井本課長)

具体的な対応に関する記載はありませんが、この内容を基本構想にどこまで盛り込んでいくか、該当箇所に入れることが可能か、検討させていただきます。

(浅井委員)

ありがとうございます。おそらく、具体的な政策はこの基本構想ができた後の話になるのでしょうか、基本的な考え方が盛り込めるかどうかということだと私も理解しています。

(事務局 井本課長)

個別の対策・事業に関しましては、下につながる実施計画さらには個別の計画などとの関係も含めて、どこまで基本構想に盛り込んでいくかということが、議論になるかと存じます。

(浅井委員)

ありがとうございます。防災・減災、それから、実際、災害が起きた際の安全みたいなことだと思います。それと、もう1つは人口減少の話です。少子化を含んだ内容ですが、前提として理解が違っているとまずいので、数字的なことを教えていただきたい。資料上にも書いてあるのですが、人口減少、自然減は相当な勢いなので、これいかようにもしようがないと思います。一方で、社会減は、たしかコロナ前は1千人前後だったと思いますが、今は2～300人ぐらいに縮小していますよね。いろいろな原因があると思いますし、人数の減少自体は好ましいと思いますけれども、それでも流出しているのは、どういう年代や性別で、どういう都市に流出しているから社会減が起きていると、統計的には捉えられるでしょうか。

(齋藤会長)

社会減の統計的に見られる特徴のようなもの、傾向のようなものですが、もし参考資料か、あるいは前回の資料あたりでお示しいただければ。

(事務局 井本課長)

第1回審議会の参考資料2-2「函館市人口ビジョン」に、関連する記載があります。13ページで「男女別年齢階級別純移動数」をお示ししております。こちらで、どの年代の男女が、どの程度移動したかがわかります。また、自然増減数・社会増減数の推移ということで、7ページに出生数と死亡数の推移、8ページに転入数と転出数の推移が記載されています。

(齋藤会長)

何か、函館市の特徴みたいなものはありますか。

(事務局 渡邊部長)

今、浅井委員からご指摘があった部分というのは、転出入の社会増減の部分が、実質的には少なくなってきていて、社会減が減少しているところのご指摘かと思いますが、本市の人口は逆三角形の状態ですので、18歳から20代にかけての若年層の転出というのは非常に多いことは変わらないのですが、その世代の全体の人数がどんどん減っているため、増減している部分も減っています。今の自然減が非常に多いというのも、ご高齢でお亡くなりになる方がどうしても多い状況に起因していますので、ご高齢者の人数が減少すると、自然減の幅も小さくなります。ただ、人口が減り続けていく構造自体は変わりません。

(浅井委員)

要はどういう人が函館市から出ていつているか、おそらく函館市に魅力を感じないから出ているだろうと。進学の時点で学生が出ていくのは当たり前なのですが、そうではなくて、出て行っている層に何か傾向があるとすれば、その人たちに応えるようなまちづくりをしないといけないのではないかと。

という発想から知りたかったことなんです。「函館市人口ビジョン」の13ページの表を見ると、20代の後半から30代半ばぐらいの女性の方が、学生を別にすれば、わりと多く社会減になっているという構造は変わっていないということでしょうか。この年齢層の全体の数が少子化によって減っているため、社会減が減っているという、そういう理解でよろしいでしょうか。

(事務局 渡邊部長)

特殊な要因が生じない限り、そうした状況にあると考えております。

(浅井委員)

そうすると、社会減は今後も縮小傾向にあると考えて良いですか。

(事務局 渡邊部長)

現在の人口構造を踏まえすと、社会減は縮小していくと考えられます。

(浅井委員)

わかりました。ありがとうございます。

(事務局 井本課長)

あわせて、参考資料1・統計資料の5ページ、図6に「年齢別転入・転出状況」ということで、住民基本台帳をベースとしたデータが掲載されていますので、ご参考としていただけますと幸いです。

(齋藤会長)

ありがとうございます。それでは、他に何かお気づきの点がございましたら、お願いします。

(秋山委員)

「(1) 人口減少・少子高齢化の急速な進行」の文言に少し気になることがあります。函館市のことをちゃんと見て書いているのかなって感じがするんですね。「東京圏への一極集中」とか、そういった書き方をされているので、全国的な資料のコピペに見えるんです。函館のことに見えないような気がしてならないんですね。もっと、現実的な文章、文言に変えることはできないのかなという疑問です。

(齋藤会長)

全国的な傾向を表しているのだろうけれども、函館市を取り巻く状況を述べている章なのだから、少し函館市の状況が分かるような書きぶりに調整することができないのかということですね。

(事務局 井本課長)

2ページの社会情勢につきましては、函館市に関してというよりは、日本の現状について概括的な記載をしている箇所となります。本市の人口などについては、5ページの「本市の現状・将来展望」でお示しているところであります。記載内容につきましては検討させていただきます。

(秋山委員)

そうしますと、別紙２－１全体が、函館市の内容ではないということでしょうか。

(齋藤会長)

社会情勢というのは全国的な社会情勢を表していて、函館市の特性などについてはその次に登場するという作りですかね。全国のことをまずは言って、次に函館市のことについて言及する作りになっているということの良いですか。

(事務局 井本課長)

その通りです。まず、全国的な社会情勢について述べた上で、本市の特性などに言及していく構成としております。

(齋藤会長)

だそうです。その他いかがでしょうか。また、お気づきの点がありましたら、後ほどご指摘いただくことにして、次に進みたいと思います。次は、「２本市の特性」です。いよいよ函館市の特性に入ります。函館市の特性として、さらに強調した方が良いもの、あるいは新たに加えるべきものなど、何かお気づきの点をご指摘ください。

(寺井副会長)

２点あります。まずは、「(２) 地域資源」の③名産品ですが、先ほども少し指摘させていただきましたが、函館ではイカが獲れなくなっているという中で、相変わらず非常にイカ推しの文章になっています。たしかにイカは有名で、とても素晴らしい産業だとわかってはいるのですが、そのスタンスを今後１０年続けていかれるのかなというのが気になりました。

もう１つは、同様に現状が微妙に変わってきているのかもしれないと思う交通の部分です。たしかに本州と北海道をつなぐ結節点ではあると思いますし、基本構想の対象地域が地域外まで含まれるということでもあるのですが、例えば新幹線などは、やはりメインになっているのは北斗市の方だと思います。それを例えば函館ということにこだわられるのか、どうなのか。いろいろなお考えがあると思いますが、そこが少し気になりました。

(齋藤会長)

イカと新幹線ですね。

(事務局 井本課長)

イカに関するご意見、検討させていただきます。また、交通に関してですが、函館市の基本構想でするので、基本的には本市に関係することについて記載をするものと考えております。内容により広域的な対応で記載をするものでございます。

(寺井副会長)

そうであるならば、その新幹線がこれから、例えば札幌まで延伸したりする中で、交通の要であるというポジションが微妙に変わっていく可能性もあるのではないかなと。そのあたりに対しての柔軟

な対応みたいなものを含めなくても良いのかなというのが気になったポイントです。

(事務局 井本課長)

5 ページにあります、本市に関係して北海道新幹線の平成28年3月開業というところから、札幌延伸を見据え、長期的な視点に立ったまちづくり、新たな交流や産業の展開につなげていくことが重要ということで、新幹線については、このような記載をと考えております。

(寺井副会長)

わかりました。私が指摘したかったポイントとしては、交通の要であって、ずっとそうであり続けなければいけないというスタンスを強調されるのか、ある程度広い地域の中で、道南の要としてあり続けても良いというスタンスを取るかで微妙に違うなということです。

(齋藤会長)

言われてみると微妙に違いますね。

(秋山委員)

そうですね。今のお話を聞いていて、なるほどなと思ったところがあるんですけど、大泉市長の政策の中に新幹線の函館駅乗り入れ構想がございますので、それを考えると、将来的に要の中の1つに含まれてくるのかなと。そういった視点から見ると、入っていても良いのかなと個人的には思います。

(齋藤会長)

他の皆様はいかがですか。

(津熊委員)

新幹線駅は函館市にはないけれど、例えば東北の方から函館に入られる方は、飛行機で来るか、新幹線で来るか、来る方法はいろいろありますけど、そのうちの1つにはなっているので、函館市に新幹線駅がないからといって、外す必要はないと思います。

(齋藤会長)

なるほど。結節点の1つではありそうだと。だから外す必要まではないのかな。他どうでしょう。

(津熊委員)

イカもそうですが、最近は天然のコンブもなかなか手に入りませんね。養殖も厳しくなっている状況ですので、この先の10年でイカと同様にコンブにもスポットを当てすぎると、少し苦しいところがあるかなと。ですので、海の資源といったような、少しふわっとした表現が良いのかなと思います。

(秋山委員)

水産物とか。

(小林委員)

私も資料を読んでいて、イカの記載は気になっていました。豊富な海産物って表現でも良いのかなと。

(齋藤会長)

その表現だと今後10年は大丈夫そうということですね。

また、広域交通の結節点という表現だと、寺井委員は違和感を抱くかもしれませんが、でも、結節点の1つであることは間違いないんじゃないかという意見に他の皆様はある程度ご理解いただける感じですかね。それでは、一旦これも事務局にお預かりいただいてもよろしいですか。

(事務局 井本課長)

検討させていただきます。

(浅井委員)

よろしいでしょうか。地域資源はハードのみですか。歴史、例えば大火の歴史は、地域資源という気がします。基本的には、①名所と②史跡で読み込んでいると言えなくはないでしょうけど、函館の主要な資源の1つとして、歴史そのものが入ってくるのではないかと思ったんですが。

(齋藤会長)

そうですね。本市の特性の「(2) 地域資源」では、①名所、②史跡、③名産品、④施設、⑤公園、⑥交通について記載されていて、どちらかというとハード面を挙げていますが、函館には、負の歴史も含めて様々な歴史があって、それも1つの資源と言えるんじゃないかというご意見です。皆さんどうですかね。たしかに、記憶に受け継がれているものも函館の特性と言えれば特性ですね。田口委員いかがですか。

(田口委員)

史跡に関する知識は中学校で学んだ程度しかないんですけど。

(齋藤会長)

大丈夫です。僕もです。

(田口委員)

子どもの頃を思い返すと、函館の歴史について学ぶ機会は多かったと思います。学校の社会や歴史の授業だったと思いますが、地元が函館だから学んだと言うわけではなくて、教科書の中に函館って単語が出てくるので、歴史を深めてみても良いのかなと、皆さんの意見を聞いていて思いました。

(齋藤会長)

ありがとうございます。では、歴史について記載する余地があるのかどうか、事務局で検討いただいてよろしいですか。

(事務局 井本課長)

いただいた視点も含めて検討させていただきます。市の歴史・来歴につきましては、本当に簡単ではありますが、「(1) 概況」の「②あゆみ」の項で触れているところになります。

(齋藤会長)

どう処理するのも含めて検討の余地があればということでお預けします。他はいかがでしょう。もしよろしければ、本市の特性の方は一区切りさせていただいて、また後ほどお気づきの点がありましたら伺いたいと思います。続いては、「3本市の現状・将来展望」です。3ページ分ございますが、その部分についてでも、あるいは、現状分析の視点とか、将来に向けて重視すべき課題など、お気づきの点やご意見などがありましたら、提起いただきたいと思います。寺井先生、最初に口火を切るのは、今日は寺井先生ですので。

(寺井副会長)

それでは、まず1点目、「(2) 経済・産業」のところに関してです。参考資料1「函館市の各種統計資料」8ページの図11「漁業就業者数および総水揚量の推移」というグラフを見て思ったんですが、漁業就業者数は段階的に減っていますが、総水揚量は上がっているんですね。これは、もしかすると環境の影響とかもあるのかもしれませんが、技術による効率化といった影響があるのかなと思いました。そこから思ったんですが、ただDXとかで新たな成長分野をと言及するだけではなくて、実際に就業人口が減少している現実もありますので、新しい技術を使った産業の効率化、農業とかも含めた、そういった視点も含まれても良いのかもしれないなと思いました。

それともう1つ。7ページ目の「(4) 土地利用の方向」①市街地のところですが、これは私の個人的な函館市に対する感想なのかもしれないんですけど、なんとなく函館市はどんどん北に向かって、栄えている地域が移動している感じがしています。発展しているところが増えていくのは良いことだと思いますが、例えば、自宅などの資産価値が変わっていくことは果たして良いことなのだろうか。もう少し計画的な都市開発みたいなことができた方が、住んでいる方のプランニングにも良いのではないかと個人的に思いまして。そういった都市計画みたいな視点を入れることはどうかと思いました。

(齋藤会長)

1つ目、たしかに総水揚量は上がっていますね。就業者数は減少している。

(寺井副会長)

偶然この年は大漁だったというだけかもしれませんが、技術によって、人が少なくても生産性は上げられることもあるかと思います。最近はいわゆるスマート農業などありますが、ドローンを使ったりすることで、より効率的な生産につながることも。減少する就業人口の対応にもなりますし、産業の活性化にも貢献できる。ですので、そういった視点を入れられても良いのかなと思いました。

(齋藤会長)

5ページの「(2) 経済・産業」の4つの項目の中には見て取れないと言うことですね。

(寺井副会長)

そうですね。効率化みたいなポイントはなかったと思います。

(齋藤会長)

D XやG Xも良いけれど、もうちょっと効率化を図るニュアンスが見えた方が良いと。あとは、市街地が北に伸びているから、もっと計画的なまちづくりみたいな視点も大切ではないかということですね。四戸委員は旧市街地の方に地域包括支援センターの圏域を持っていますが、計画的なまちづくりに関してご意見いかがですか。

(四戸委員)

西部地区は人が少なく、高齢化率がすごく高い地域です。今、函館市全体の高齢化率は37%ぐらいですが、西部地区に限って言うと約47%です。入船町や船見町など50%を超えている町が何箇所もあります。大森町も50%を超えていますので、高齢者の方が多いのもたしかにそうなのですが、高齢化率が上がるということは生産年齢人口の率が低く、西部地区に関して言うと高齢者の数自体は実は微増くらいですが、高齢化率はどんどん上がっています。要するに、子どもやその親世代が住んでいないということで、空家問題も深刻です。ですので、西部地区でどうしろと言われても、正直どうすれば良いんでしょうという感じです。人がいないので、今いる人で今できることをやるというのが今の西部地区なのかなと。圏域が北の方の桔梗などになると、高齢化率も30%以下で若い人もいますので、いろいろとやれることはあると思いますが、西部地区はこの辺も含めて結構厳しい状況かと思っています。函館市の人口減や高齢化率の先を行っているのは西部地区だと思ってまして、人口も減っていますし、高齢化率も上がっているというところですね。まず子どもが少ないです。

(齋藤会長)

改めて、7ページの「①市街地」を読ませていただいた時に、既存資源の有効活用、都市機能の集約化、居住機能と都市機能の適正な配置、コンパクトで持続可能な市街地の形成というところまでは書いてあるけれども、寺井副会長、もうちょっと書きぶりが足りないということでしょうか。

(寺井副会長)

そうですね。今の四戸委員のご指摘を伺うと、適正な配置という意味ではそうなのかなとも思います

(事務局 井本課長)

総水揚量につきましては、技術進歩の要素もあるかと存じますが、各年の気候の状況、ブリ・イワシ等の情勢なども影響していると考えております。また、都市計画に関しましては、都市計画マスタープランや立地適正化計画など、個別の計画等があることも踏まえまして、基本構想にどこまで記載するかという判断になるかと考えております。

(寺井副会長)

わかりました。

(齋藤会長)

他の皆様方、お気づきの点はいかがでしょうか。

(津熊委員)

土地利用に関してですが、私は外から来た移住組なので少しびっくりしているのですが、特に西部地区などは借地が多いです。土地を手放さない。今、私は移住サポーターをやっていて、移住で来たい方は西部地区に住みたいという方も結構多いのですが、物件を購入しようとしても良いものがないんです。すごく古かったり、そもそも数自体が少ない。どういうことなのでしょう。

(齋藤会長)

購入したいニーズはあるけれども、購入を検討する方のニーズに合ったものが少ない、あるいはないということでしょうか。四戸委員、いかがですか。

(四戸委員)

地域包括支援センターとしては、毎年自分の圏域のいろいろな気づきや地域課題に取り組んでいますので、空家や空き地の問題というのは毎年必ず出てきます。西部地区は今おっしゃった通り、借地に自分の家を建てている方が多いです。西部地区以外であれば、土地も家も自分のものという方が多いので、例えば高齢者の方が施設に入るとか、お子さんと同居する際には、家と土地をセットで売りに出すなど処分することができますが、西部地区ではそれが難しい状況です。西部地区は昔栄えた地域ですので、坂の上に家を建てて住むことがステータスという方も結構多くて、さらに自営業の方がすごく多いんですね。昔は国民年金や厚生年金を払っても払わなくても良いような時代が、今の 80 代後半ぐらいの方にはあったので、自営業で景気の良い時代は自宅を維持できるんですが、年金をもらう世代になると維持できなくなる方もおられます。例えば施設に入ったり、お子さんのところに行くにしても、借地は建物を壊していかなければならず、解体費用も今の時代 100 万、200 万ではできないので、やむを得ず放置して出ていかれる方が実際は多いです。不動産にしても、名義がわからなくなっている家を勝手には壊せませんので、どんどん空家が増えているというのが、西部地区の他の圏域にはない特色なのかなと思っています。

(浅井委員)

今、竹内委員も商工会議所の事務局長として参加されていますが、商工会議所に属している方やその他の方々含め、函館には支社長や支店長として来られる方が大勢いらっしゃいます。ほぼキャリアの最後で来られていて、60 歳で東京に戻ることもできるのですが、役職定年という方が結構多いので、彼らはわりとそのまま函館で別の企業に就職したり、東京に戻ってからもう一度函館に戻ってきたりされているようです。その時に、すでに西部地区のマンションに住んでいる方でも、西部地区の古民家などを新たに買って、リフォームをしたいと考える方がおられるのですが、家主が物件を売ってくれないということで、いまだに以前から住んでいたマンションに住み続けている方を何人も知っています。この世代の人たちは、函館にとって非常にありがたい存在だと思います。所得は高く、経済的活動を続けていて、いろいろなボランティア活動も率先して行っただけの人たちなんですね。なぜ彼らが西部地区に住みたいかというと、西部地区は函館の原風景で、函館らしさはまさにここなんだと感じているからなんです。そういう方はすごく多いように思います。一方で、空家がそのまま放

置されてしまうと、火災などのリスクがありますので、防災の観点からも、市の方でいろいろやってはいただけますけれども、この問題は何らかの対処が必要な事柄なんだろうなということに、私も大変同意します。

(齋藤会長)

このまちを考えるうえでは、この問題意識はすごく大切で、頭に置きながら議論することが大事だと思います。では、別紙3のまちづくりの視点に移って良いでしょうか。まさに今、浅井委員からまちづくりの視点としてこれが大事だというお話があったところですので、こちらの話にも関わってくるなと思って次に行きたいと思ったんですが、ここに4つの視点を掲げているんですよ。まちづくりの横断的な考え方としてこの4つを整理しているんですけども、これを見ていただいて、これは妥当なんじゃないかとか、あるいはここが不足しているんじゃないかというところがあればご指摘いただければと思います。浅井委員から見ていかがですか。

(浅井委員)

4つの分類としてはとても良いなと思っているのですが、いくつか気になる点があります。まず、先ほど地域資源に関して歴史という話をしましたが、地域資源こそがシビックプライドの原点だと思います。だからこそ、歴史というソフト自体が、子どもたちのシビックプライドの源泉になっているのではないかと。そういう意味で、シビックプライドの醸成と合わせて、子どもたちに対する教育的な観点とのつながりもあるのだろうと思っています。

例えば長野県の飯田市では、信州大学のサテライトを誘致していて、同大学の先生方の助けを借りて高校生等にまちづくりのプランを作らせていて、実際に実現しているものもあるようです。そうした経験や関わりによって子どもたちのシビックプライドを育成し、いつか戻ってくるための手段にしているのですね。このように、シビックプライドの醸成と教育、地域資源はつながってくるだろうとの感想を持ったのが1つです。

もう1つは、ウェルビーイングについてです。物質的な豊かさを求める価値観から、心の豊かさを求める方向に移るといような書きぶりですよ。ウェルビーイングやハピネスは、一般にどちらも幸福や幸福感と訳されます。違いは何かと言うと、ハピネスはお金で買える幸せ、ウェルビーイングはたぶんお金で買えない幸せなのですが、実はウェルビーイングを得るためには、ハピネスがいくつもの必要なんだと思うのです。例えば、弊社や他の観光事業者の女性管理職がどのように休暇等を使って生活の中に楽しみを見出そうとしているかと言いますと、まさに函館の強みである新幹線や空港を使って、自分の趣味や推しのコンサートに行ったり、韓国等海外に旅行に行ったりと、そういうハピネスの積み重ねをしているように見えます。統計的には明らかなのでしょうが、子どもを産むか産まないかで最も相関関係が高いのは、結婚しているかしていないか。そして、結婚について最も相関関係が高いのは所得です。所得がないと結婚できないという現実があります。統計的にも、2000年頃には400万円ちょっとくらいで男性の50%が結婚していました。その所得帯が男性基準で見ても、今は520万円くらいに上がっています。つまり、500万円ほどの収入がないと男性の半分くらいの人たちが結婚できていない。なぜなら、2000年頃から可処分所得は2〜3割ダウンしているからです。つまり、ある程度稼ぐ産業の基盤があって、雇用と所得があり、ハピネスがあって初めて、結婚するしないは本人の自由ですけども、そういうことも含めたウェルビーイングにつながっていくということなので、完全にハピネスからウェルビーイングに世の中が移っているということではな

いと思います。観光業を含め、稼げる産業があつて初めてこういうところにつながってくるのではないかと、私自身はこの4つの視点を見たときに以上のような感想を持ちました。

(齋藤会長)

ありがとうございます。その他、お気づきの点がありましたらお願いします。

(寺井副会長)

3番の地域資源の活用ということで、たしかに函館市は非常に環境や資源に恵まれていると思うんですが、それを活用して稼ぐというスタンスがすごく表に出ているかと思います。一方で、例えば自然環境など、すぐにはお金にならないけれども守っていくという観点も必要なのかなと思います。そういう視点から、例えば4番の未来への投資などで、自然環境の保護といった観点を含めなくて良いのかなと気になりました。

(齋藤会長)

教育やハピネス、また、自然環境など、お2人から意見が出ましたが、他に何かありませんか。

(小林委員)

私は資料を読んでいて、このまちづくりの視点のところがすごく気になったんです。先ほど移住の話が出ましたが、シビックプライドの醸成ということで、市民が誇りや愛着を持って、このまちをより良い場所にするために、自ら主体的に関わろうとする、当事者になるという意識を持つことが大事だと、いろいろな本を読んでいても思いました。やはり函館のまちに住んでいて、若い人たちに愛着を持ってもらうとか、主体的に関わろうとしてもらうことが大切です。若い人たちと話をすると、「観光客にとって、函館は素敵なまちで、また2度3度と来たいと思ってもらえるくらいすごく良いまちだけど、住んでいる私たちが函館に誇りを持つとか、愛着を持つということはどういうことなのか、毎日の生活の中でなかなか見出すことができない。」という言葉聞いたときに、これはなんとかみんなで考えていく必要があるのではないかと思います。先ほど空家の問題が話に出ていましたけれど、西部地区に限らず、産業道路から北の地域、その辺でも高齢化で空家が出てきています。この間までおばあちゃんが住んでいた家が売りに出されていたりするので、やはり人口減少と空家の問題、それをどう解決していくかということも真剣に考えていく必要がありますし、若者が函館に愛着を持ってもらうにはどうしたら良いのかということが、私の大きな課題意識になっています。

(齋藤会長)

シビックプライドにも繋がる少し横断的なご指摘でした。ありがとうございます。その他何かお気づきの点はありますか。

(秋山委員)

2番のシビックプライドの醸成のところですね。個人的には、「市民一人ひとりが地域に愛着と誇りを持ち」という言葉がすごく好きなので、この言葉を入れていただいたのはありがたいなと思っています。持続可能なまちづくりについて、先ほどの浅井委員からご指摘があった通り、ウェルビーイングにたどり着くにはハピネスが必要だということは、たしかにその通りだと思うのですが、なかなか

市民一人ひとりの所得をそこまで上げるというのは現実的に厳しいのかなと。であれば、現状の中でいかに幸福感を得られるかというところに視点を置くことが、手っ取り早いと言ったら少し言い方があれですけども、持続可能なまちづくりをぐっと手繰り寄せるキーポイントになるのではないかと思います。そうなった場合、自分事として主体的に地域課題に関わっていただくということで、どんな仕事をしている方でも構わないのですが、もっと積極的にいろいろな市民の方が参画できるような政策ですとか、イベントなどがどんどん増えていくことで、自分も函館市民の一人だという自覚を持ってもらえると良いのではないかと思います。

(齋藤会長)

ありがとうございます。シビックプライドの醸成に関わるご意見でした。その他はよろしいですか。今の視点は、ちょうどこの限られた時間の中でどこに紐付けられるのか、あるいは紐付けられないから書きぶりを少し調整した方が良いのか、いったん精査が必要だと思います。委員の皆様方から出されたご意見は、どこかに紐付けられる部分があると思う一方で、紐付けられない部分もあって、そこについては書きぶりを調整しなきゃいけないと思います。そこを今、この時間で精査するのは難しいので、これはこれで切り上げて、いったん事務局にお預けしようかなと思っています。またお気づきの点がありましたら後ほどご指摘いただければと思います。いったん第4章に進みます。別紙4「4 目指すまちの姿」です。これについては、今までの皆さんと一緒に構想全体の各章にわたって議論してきた内容を包含して、目指すまちの姿として大きな方向性を2つ示されています。現行の基本構想の目指す姿は「北のクロスロード」ですが、それだと少しわかりにくいから、もうちょっと具体的に身近な表現を掲げた方が良いのではないかと、それを2つに収斂した表現になっています。具体的な文言ではないですが、この2つのイメージを持ったタイトルを付けてはどうかというのが、1つのたたき台として示されているわけですけども、この方向性が今までの議論と違うんじゃないかとか、今後の方向性としては少し不足があるのではないかとか、あるいは文章の表現として書きぶりの調整が必要なんじゃないかなど、ご意見がありましたらご指摘いただき、これはこれで良いということであれば、その旨のご意見をいただければと思います。

1つではなく2つ掲げるというのはどうですか。現構想「北のクロスロード」は1つですが、1つではなく2つの方が良いのか、視点としてどうなのか。こういうイメージのフレーズを2つ掲げようというのはどうでしょうかということなんです。

(佐藤(ひ) 委員)

目指すまちの姿として2つ挙げられていて、それは前回の資料にも記載されていたので、イメージ的にこの2つでいくのかなと捉えていました。別紙4の資料を見たときに、少し気になった点があります。「ふれあいに包まれ、安心して暮らし、子育てができ、若者が住み続けたくなるイメージ像」の方ですが、読んでいくと一番下に「子どもから高齢者まで、誰もが住み続けたくなるまちづくりを進めます」とあります。どちらにも「住み続けたくなる」という言葉を使っているだけに、上では若者に特化していて、下では「誰もが」や「子どもから高齢者まで」となっていて、これをどう捉えたら良いのかなと思いました。きっと、子どもから高齢者まで誰もが住み続けたくなるまちづくりを進めていく中で、若者の流出が多いことや就職の関係などの影響があることを捉えて、「若者」に特化して書いたのかなとは思いますが、整合性が気になりました。

(齋藤会長)

ニュアンスは分かりますが、たしかに字面を見ると上と下の整合が気になりますね。

(佐藤 (均) 委員)

2つのイメージ像からは、食文化を蔑ろにしているんじゃないかなという気がしました。同じ釜の飯を食べるではないですが、やはり郷里の食べ物というのは、子どもたちが成長した後にも懐かしむものになると思います。だけれど、現代はコンビニやファストフード店が台頭しており、地域ならではの食文化がだんだん薄れてきていますし、先ほど寺井委員もおっしゃっていましたが、イカが獲れないので、ますます函館の色がなくなっているというのが、少し寂しいなと思っています。また、「今後成長が期待される分野における産業振興を推進します」の部分、これが具体的な内容として出てきた時に、それに合致しない方々がどれだけ落胆するかと思いますので、もう少し配慮のある書き方をしていただけると助かります。特に私どものように水産業や観光業ではなくても、ホテルなどで私たちが生産している野菜などを使っていただくことを振興していただけると、市内全体の連携が取れるかなと思います。

(齋藤会長)

ありがとうございます。少し書きぶりの調整が必要ですね。配慮が必要だというご指摘でした。

(竹内委員)

目指すまちの姿ではなく全体的な話になります。インクルージョンの視点と逆行するかもしれないのですが、人材育成や人材投資の部分でイメージしたのは、役割としてのリーダーなんです。リーダー一人材の育成と地元定着みたいな視点で、創業支援など色々書いていただいているのですが、全体として労働者の地元定着みたいな色が濃いのかなと感じました。若い方々の中で、起業・スタートアップを目指す方々の地元定着や人材育成など、そういった視点も必要なのではないかと思いました。

(齋藤会長)

ありがとうございます。

(永澤委員)

目指すまちの姿の1つ目に記載がある「世代を超えた交流」についてです。私は万代町会の活動の中で、なかなかお手伝いをしてくださる方、組織の中に入ってくださる方がいらっしゃらないので、まず子どもが来たら親は付いてきてくれるだろうという感覚で、「次世代の部」を作りました。小学生から18歳までの子どもたちに活動いただいています。活動は2年目になりますが、その中で、やはり子どもが地域のコミュニティ活性化という形の中に入ってくると、大人も一緒に付いてきてくれる。けれども、そこで終わってしまうんです。その先がなかなか、私たちが活動している中で難しいところだなと思いながら、どういう形で物事を進めていったら良いのか、今も模索している状態です。「誰もが住み続けたいくなるまちづくり」ということで言うと、私たちの町会の有志で「函館の地域福祉を考える会」というものを立ち上げまして、活動して15年以上経つんですけども、活動の中では函館に住み続けたいけれど住み続けることが難しい気持ちを持ってしまう方と出会います。なぜ住めないのかというと、誰も面倒を見てくれる方がいないからという場合があるんです。でも、そ

の中で例えば地域の民生委員や在宅福祉委員といった方々が安否確認に行くんですけども、家に入られるのが嫌だと拒否する方もいらっしゃいます。そのギャップは何なのかと考えていくと、やはり経済的なものがネックになっているというのが、最近わかってきました。なぜこの話をするかという、経済的に貧困になると、なかなか町会の活動にも参加していただけないです。なぜ参加できないのかという、やはり身なりを整えないと来られない。そういった部分も、もっと細かくケアしていかなければ、このまちに住み続けたいこと、また、豊かな老後にも繋がらないと感じています。ですから、活性化、活性化とよく言われるんですけども、高齢者は一生懸命、活性化のために頑張っています。若い方も一生懸命家計を支えながら生活していかなければならず、町会活動にもなかなか参加はできません。けれども、子どもだけは見てほしいという要望もあります。そういった背景を踏まえ上で、どうしたら誰もが住み続けたいまちづくりを進めていくことができるのかと正直感じています。

(齋藤会長)

ありがとうございます。みんな一生懸命なんですよ。高齢者は一生懸命だし、現役世代も必死なんです。だから、その中でどうやって誰もが住み続けたいまちをつくっていけるだろうということ、本当にその問いかけはここだけにとどまらないなと思って伺っていました。

(田口委員)

4 ページ目の地域資源なのか、8 ページ目のまちづくりの視点のところなのか迷いましたが、函館市は港まつりなどの祭りが盛んで、また、小学生は皆いか踊りを踊れるとネットで見ました。先日の函館マラソンは参加者が過去最多というニュースもありましたし、名産品ではないですが、どこかに入れられるのかなと思いました。ラッキーピエロやハセガワストアのやきとり弁当など、観光客は皆食べていきますし、GLAYのTERUさんやTOKIOの松岡さんなど、函館の魅力を広めてくださっているので、基本構想に固有名詞は掲載できないとしても、どこかに盛り込めるのではないかと思います。

(齋藤会長)

イベントやグルメ、それから有名人の情報発信など、そういったことは先ほど浅井委員がおっしゃっていたハードではない部分ですよ。ハードではない部分が函館の魅力だったりするので、そこへの着目というのが、もしかしたら不足している観点と言えるかもしれませんね。今のご指摘はもっともだと思います。

(津熊委員)

限りある予算の中で、まちをいかに発展させていくかということに関連した小さな話になりますが、私は子どもが幼稚園の時にPTAの会長をしていたんですけども、子どもが小さい時、なかなかお母さんは外にも出られずストレスを抱えるので、その時に企画したのが、お母さんによるお母さんのための音楽会と、お母さんによる子どものための音楽会という2本立てのもので、年に1回音楽会を実施しました。お母さんの中には、ピアノやフルートを吹けるような人材が結構おられるんですね。小さい子どもがいるから発揮できる場所も限られるのですが、その行事は30数年経った今でも、その幼稚園で続いているそうなんです。限りある予算の中で、今いる人材にもっと活躍してもらえよ

う、そういったことを仕掛けていくことについて、市などにもお願いしたいなど。例えば、コンテストをすとか、何かについて応募していただくとか、それを函館市の大きなイベントとしてやることによって、ふだん光が当たらない方たちも応募できますので、そういうことができれば良いなと思いました。

(齋藤会長)

ありがとうございました。市として頑張っていたきたいというのもあるのですが、一方で、基本構想は前回も話しましたが、私たちが一緒に頑張っていこうねという確認もしたい、そういうものでもございます。今の津熊委員のご発言は、市に向けられた言葉でもあり、我々に向けられた言葉でもあるなと思いながら伺っておりました。それでは、まちづくりの視点のところを議論していたんですが、まちづくりの視点にかかわらず、他の点からでも、あるいは全体を通してでも良いので、お気づきの点がありましたらご発言いただきたいです。

(寺井副会長)

今回の会議に参加できないため今言わせていただきます。9ページとその先に関係してくるのですが、「安心して」という言葉がすごく出てきます。それがすごく気になりまして。例えば、9ページの「安心して暮らす」というのは、「不安はない」ということなど色々なことが考えられますよね。市として発展していくことが良いというスタンスでも、発展していくと世界が変わり、それについていくのは不安だということもあります。「安心して」というのはとてもまとめやすい表現ですが、実は本質を表してはいないのではないかと思います。「安心して暮らす」というのは、快適に暮らすことを目指していきたいのか、それとも安定した暮らしを目指していきたいのかなど、もう少し絞ったところまで踏み込んだ方が良いのではないかと思います。

(齋藤会長)

次回以降の議論の内容を踏まえて、そこから逆算して目指すまちの姿の1つ目を眺めたときに、「安心して暮らす」というのは別な表現の方が良いのかもしれないというご指摘をいただきました。その他いかがでしょうか。これまでの議論の中で、目指すまちの姿の2つのイメージ像については、1つ目の「ふれあいに包まれ、安心して暮らし、子育てができ、若者が住み続けたくなるイメージ像」のところで、「若者が」と「誰もが」というところのアンバランスさが気になる、ニュアンスは十分伝わってくるんだけど、そこは何かならないかというお話と、「安心して」というところのニュアンスが、もう少し市民に伝わりやすい表現になると良いよねというお話をいただいております。それ以外に何かありますか。そこが直れば、大きく方向性としては了解できますか。細かい書きぶりは、皆様からたくさんご指摘いただいたので変わってくると思います。第1章から第3章まで、書きぶりが多少変わって出てくるのかなと思いますが、今の9ページの「目指すまちの姿」の2つに限って言えば、今日の議論をある程度包含していて方向性としては大きく違わないという理解をしても大丈夫でしょうか。多少の調整は要すると思うんですけども。

(小林委員)

先ほど、佐藤（均）委員から、まちに活気や賑わいのところに、農業のこととかをもう少し加えると良いのではといった話が出ていました。

(齋藤会長)

そうですね。まさに活気や賑わいのところに、農業の点など、先ほどご指摘いただいた点を調整が可能であればということですね。大きな方向性としては良いでしょうか。

(佐藤 (均) 委員)

イメージ像は問題ないと思います。

(秋山委員)

イメージ像の説明文を読むと意味はわかるのですが、イメージ像だけを読むと、2つは同じことを書いていると感じます。1行目と2行目をひっくり返しても意味は変わらないんですよね。ということは、同じことを言っている気がしていたんです。

(齋藤会長)

裏表の関係みたいな。

(秋山委員)

例えば、2つのイメージ像の1行目と2行目を入れ替えて「ふれあいに包まれ、安心して暮らし、子育てができ、ここで仕事をして暮らしていきたいと思えるイメージ像」と言っても何も違和感がありません。ということは、これ2つとも同じ意味じゃないかなとずっと思っていたのですが、根本を揺るがしてしまうと議論が終わらなくなる気がしたので、あえて言わないでいたんですけど。

(齋藤会長)

イメージ像の文章に、すごく違和感があると。

(秋山委員)

イメージ像の下にある文章があるから読み取れるかなという感じがしました。

(齋藤会長)

出来上がりはどのようなイメージになりますかね。

(事務局 井本課長)

現時点でイメージによる記載をしており、少しミスマッチが出てしまっているかもしれません。

(齋藤会長)

書いていることは別に悪くはないけれど、この2つは裏表の関係にある。

(秋山委員)

2人の人間じゃないですが、双子みたいな感じです。

(齋藤会長)

この2つの方向性については了解できるが、どのような書き方をしたら良いのかについては、どうですか。

(事務局 渡邊部長)

少し考えます。みんなが目指したいまちというのは、きっとこの2つのイメージ像の文章を合わせたものになります。「ふれあいに包まれ、安心して暮らし、子育てができ、若者が住み続けたく、まちに活気や賑わいがある」と、全部を包含したまちにしたいんです。ただ、全部を1つにまとめた形にしてしまうと、それはそれでわかりにくくなってしまうので。

(齋藤会長)

「北のクロスロード」みたいな。

(事務局 渡邊部長)

暮らしに特化したものと、産業、働いていくことに特化したもので2つ。これを細分化するともっと広がってしまうのかなということで、今2つ置いています。2つじゃなくて3つだよということもあり得ると思いますし、今のご指摘で言うと1個にまとめたものになりますが、わかりにくくならないように、2つを提示しているという形です。

(齋藤会長)

建付けは少し考えていただくということでお願いします。方向性としては、この2つの方向性が今日の議論から大きく違うものではないということは了解できるかと思います。ただ、それを2つにするのか、3つにするのか、1つにするのかというところは、少し工夫できるものなのかというところをいったんお預けします。

(寺井副会長)

ジャストアイデアなんですけど、私もたしかに、これはすごいほぼ同じであると思っていました。ただ、狙いもわかります。おそらく、左側は生活面で、右側はそれを支える手段なのかなと。ほぼ同じに見えているのは、どちらにも「暮らしていく」という言葉が入っていることもあると思います。例えば、右側を「ここで仕事をして活躍していきたい」とかにすると、より手段っぽい雰囲気が出て差異が出てくるかなと思いました。

(齋藤会長)

左右でニュアンスを書き分けた方が良く。

(寺井副会長)

はい。表現したい側面をクリアにされると良いのかなと思いました。

(齋藤会長)

ありがとうございました。それでは、いったんこれを一区切りにさせていただいて。全体としては

了解できると、ただどういう書きぶり、書き分け方があるのか、工夫の仕方についてはお預けさせていただいて、また改めて提示いただくことを期待したいと思います。ありがとうございました。

限られた時間の中での議論ですので、まだ言い足りなかったということもあるかと思いますが、全体としてのご意見もいただき、目指すまちの姿についても全体のコンセンサスを得ることができました。少し気にかかるのは、次回、寺井副会長を含めて数名の方がご欠席予定の点です。欠席の委員の皆様方には、次回の会議で議論する内容について少しでもご意見をいただくのが一番良いと思っていますので、本日は時間の都合で何うゆとりがない状況ですが、何か書面で、お気づきの点を書き出していただいて、次回の会議でご紹介させていただき、それを基に議論させていただくような形を取らせていただいても良いでしょうか。事務局、それで構いませんか。

(事務局 井本課長)

差し支えございません。

(齋藤会長)

それでは、申し訳ないですが、次回欠席の委員の皆様方におかれましては、次回の議論分、実施に向けての基本方針、基本施策についての議論を次回は予定しておりますので、こちらについてのご意見や、お気づきの点がありましたら、箇条書きで結構ですので書き出していただいて、事務局に預けていただくと助かります。次回もご出席の皆さんは、また今日のように議論を進めさせていただければと思います。次回は来週ということで期間が短くご苦勞をおかけしますが、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

(2) その他

(事務局 西山主査)

－ 事務連絡 －

3 閉会

(齋藤会長)

それでは以上をもちまして、第2回函館市基本構想審議会を終了いたします。長時間にわたり、ご協力いただきありがとうございました。